

した。これらの人々のご好意にも感謝の意を表したいと
 思います。最後に東大地球物理学教室気象研究室の松野
 教授をはじめスタッフの人々には資料作成で大変お世話
 になったことを付記しておきます。

文 献

Gadgil, S. et al., 1984: Ocean-atmosphere coupling
 over monsoonal regions, Technical Report,
 84AS5 Indian Institute of Science, CAS.
 Hoskins, B.J. and D.J. Karoly, 1981: The steady
 linear response of a spherical troposphere to
 thermal and orographic forcing. J. Atmos. Sci.,
 38, 1179-1196.

大関 誠・岸保勘三郎, 1984: 熱源に対する大気の
 応答について, 日本気象学会秋季大会 (1984) 予
 稿集 (108頁).
 Platzman, G., 1968: The Rossby wave, Quart. J.
 Roy. Meteor. Soc., 94, 225-248.
 Sikka, D.R. and S. Gadgil, 1980: On the maxi-
 mum cloud zone and the ITCZ over Indian
 longitudes during the SW. monsoon, Mon. Wea.
 Rev., 108, 1840-1853.
 住 明正・村上多喜雄, 1984: モンスーンをめぐる
 諸問題, 気象研究ノート, 149号, 1-111.
 Yasunari, T., 1979: Cloudiness fluctuations asso-
 ciated with the northern hemisphere summer
 monsoon, J. Met. Soc. Japan, 57, 227-242.



朝 倉 正 著
 「気候変動と人間社会」

岩波現代選書, 1985年,
 214頁, 1700円

本書を読みすすむにつれ、著者が中心となり作成した
 気象庁の「気候変動対策」というリーフレットを思い出
 した。今からおよそ4年前になるが、気象庁に気候変動
 対策室が設置され、著者は初代室長として3年間務め
 た。当時は、そもそも「気候変動対策」という言葉自体
 が気象庁内でさえ耳新しいものであった。そんな中で、
 スタッフの一員であった筆者自身もなぜ気候変動の問
 題がクローズアップされて来たのか、また気候変動対策
 とは何を目指しているか等について平易に解説したパン
 フレットを作ろうと、おおげさなようだが前人未踏の世
 界に踏み込むような心境で模索したことを思い出す。し
 かし、4年たった現在ではこの言葉も定着しつつあり、
 気候変動の問題は広く社会の関心を集め、大学や研究機
 関でも様々な気候問題について研究がすすめられている。

前置きが長くなったが、本書にはこのリーフレットに
 述べた気候変動問題に対する基本的な考え方が反映して
 いる。

第1章では、人類は過去に2度の危機を乗り越えて来
 たが、現在我々は第3の危機に直面しつつあると主張す
 る。それは人類と自然とのアンバランスに因るものであ
 り、背景として人口増加と気候変動による食糧生産の不
 安定性があるとする。

第2章では、天候の影響を次第に克服してきたかのよ
 うにみる現代社会が、以前に増して気候変動に対するも

ろさを露呈している点を、例えば、1977年の日・米両国
 を襲った大寒波や1972年の世界的な異常気象が社会・経
 済に与えた影響を通して示す。

第3章では、気候変動と食糧の問題について論じる。
 食糧需給構造は将来さらに不安定性を増すだろうが、そ
 の要因として需要の増大とともに、供給構造自体が気候
 変動に対するぜい弱性を増す点を指摘する。

第4章では、気候変動と水資源の関係、特にアジア
 地域の降水変動を、モンスーン、チベット高原の役割、
 ENSO 等に関連して説明する。

第5章では、気候変動の温暖化説と寒冷化説の妥当性
 を評価し、最近では温暖化説が多くなったこと、また気候
 変動と異常気象の関係及び異常気象の原因について解説
 する。

第6章では、気候変動の要因として人間活動を取り上
 げる。都市化や人工熱放出、砂漠化、炭酸ガスの増加等
 が気候変化を導くプロセスについて考える。

最終章では、近い将来予見される気候とその対策につ
 いて述べる。今後起こりうる気候変化に対し、その対策
 のために気候学者が果たすべき責任について、具体例をあ
 げて示唆している。

気候変動の問題は、自然科学としての気候学の問題に
 とどまらず、関連する水資源・食糧生産の問題に広がり、
 その社会・経済に及ぼす影響に至るまで、様々の専門
 分野にわたる幅広い問題を扱うので、問題の本質をつ
 かみにくいきらいがある。本書では、著者はできるだけ
 平易な表現を使うよう心がけ、読者が理解しやすいよう
 心をくわしている。気候変動をめぐる問題およびその対
 策について考える時、本書から多くの示唆を得ることだ
 ろう。

(栗原弘一)